

# 学生が行く！土木のお仕事

三室 碧人 学生編集委員  
篠崎 真澄 学生編集委員

## 第2回 「青森県」津軽ダム（人物編）

# ダムの再開発をひもとく！

〔取材先〕 国土交通省東北地方整備局 津軽ダム工事事務所

〔語り手〕 山谷 正樹氏 国土交通省東北地方整備局 津軽ダム工事事務所工事課 工事第一係長

加藤 雅一氏 (株)間組 津軽ダム出張所工事係



津軽ダム堤体の全景(2012年9月下旬時点。斜線部が完成予定)。左は既存の目屋ダム。

「立場が違えども、信頼関係こそ土木の基本」。そう語るのは、津軽ダム本体工事を支えるゼネコンの若手技術者・加藤雅一さん(入社4年目)と国土交通省の中堅技術者・山谷正樹さん(入省20年目)。経験年数や受発注者としての立場も異なる2人に、それぞれの土木技術者として生きる醍醐味を伺った。

—— 初めに、津軽ダムの工事体制と、日々の業務内容をお教えてください。

**山谷**—— 津軽ダムは堤高97・2m、堤

体積71・7万m<sup>3</sup>の重力式コンクリートダムです。ダム堤体工事のほか、水質保全施設や鉦澤ダム(管理・青森県)に対し湛水の影響を与えないための保全ダムの建設などを行い、完成すると総貯

水量は1億4090万m<sup>3</sup>となり、既存の目屋ダムの3・6倍になる再開発事業です。ダム本体工事は、国土交通省が発注し、間組と西松建設がJVを組み、協力会社約30社(会社数)の力を借りて総勢約300名が従事しています。

**加藤**—— 私はゼネコンの入社4年目

で、堤体のコンクリート打設を担当し、品質管理試験の管理とデータの分析、コンクリート配合の調整やセメント等の材料管理などの業務を担当しています。データ整理などは大学の研究室で経験したことを生かしています。

**山谷**—— 私は発注者側でダム堤体関係を担当する係長を務めています。具体的な業務内容は、施工の工程や方法に遅れ・不備がないか、コンクリートなどの品質は発注要件を満たしているかなどの確認を、施工会社の技術者と連絡を取りながら進捗管理をしています。現場は図面通り、工程通りに進まないことも多いので、コミュニケーション

をしっかりと取ることを意識して日々業務に取り組んでいます。—— 加藤さんは入社4年目ですが、入社後の悔しかった経験や、そこから学んだことがあれば教えてください。

**加藤**—— 入社直後の自分は、現場に

いるだけの存在で、先輩に付いて回る日々でした。最初の鹿児島現場や赴任直後の津軽ダムでもそうですが、自分より年上で知識や経験も豊富な協力会社の職員や作業員に指示を出しても、若手である自分の声に耳を傾けてもらうことは容易ではありませんでした。それでも片意地を張らずにわからないことは素直に聞き、コミュニケー

ションを重ねることで、少しずつ信頼関係を築いていくことができ、コミュニケーションの大切さを学びました。

**山谷**—— 私と加藤君が最初に仕事をしたのは休日のコンクリート打設です。私は安全を最優先に考えるため、重機が作業員の近くを走行する状況を改善するように加藤君に厳重注意したことが始まりでした。こういったことから生まれる信頼関係もあると実感しています。

—— 山谷さんは、20年以上の経験をお持ちですが、現場を円滑に進めるために心がけている「こだわり」などはありますか。



写真1 インタビュー中の風景(左:加藤氏、右:山谷氏)



山谷 正樹さん(国土交通省)

YAMAYA Masaki

1974年青森県生まれ。1993年に国土交通省に入省。河川とダムを専門とし、河川を9年、ダムに10年半携わる。2012年4月から津軽ダム建設の堤体関係の監督員として従事。現在38歳。



加藤 雅一さん(間組)

KATO Masakazu

1983年東京都生まれ。2009年に東北大学大学院を卒業後、(株)間組へ入社。鹿児島県のトンネル建設現場を経て、入社後二つ目の現場として津軽ダムへ赴任。現在、29歳。

山谷——私は、説明の仕方<sup>を</sup>を大切にしています。何か指示を出す時には、その本質的な理由を必ず伝えることが、現場を円滑に進める私の<sup>の</sup>こだわりです。

——なぜ、人生をかける仕事として、土木技術者を目指されたのでしょうか。

山谷——私と土木の出合いは、小学校3年生の時に、青森県中央部にある浅瀬<sup>せしがわ</sup>瀬石川ダムの建設現場を見学したことに始まります。土木のスケールの大きさに憧れ、土木工学科のある高校へ進

学し、土木技術者になる夢とチャンスが重なり、現在の職を選びました。

加藤——父が建築士であることから幼少期からモノづくりに興味があり、その中で土木は大規模で生活に根づく仕事だと思ったからです。就職活動の時点では、コンサルタント、官公庁、インフラ事業者などの選択肢もありましたが、モノができる過程を一番身近に

感じる事ができるのはゼネコンだと考え、間組に入社しました。

——実務を通じて実感した「土木の仕事の魅力」について教えてください。

山谷——私は「非常時に何も起きなかったときに」、土木の仕事のやりがいを感じます。加藤君とは少し視点が異なりますが、私は「モノをつくることだけが土木ではない」と考えています。津軽ダムで言えば、最終目的はダム堤体工事を完成させて洪水調節機能を発揮し、下流を被害から守ることであり、ダム工事の完成はその通過点でしかありません。河川管理者の立場からすると、たとえば、今までは大雨で氾濫していた場所が、自分たちが携わった仕事によって無害であった時に喜びを感じ、またそれも土木の魅力だと思っています。



写真2 コンクリートの品質試験中(右:加藤氏)

加藤——入社当時は深く考えていなかったのが素直な気持ちです。しかし

現場に配属されて実感したことは、土木構造物の建設には、非常に多くの人に関わっているということです。一人ひとりのやっていることはとても小さなことですが、多くの人が集まり、長い年月をかけて、やっと一つのモノが出来上がります。多くの人と関わり、信頼関係を構築して、困難を乗り越えていく過程が苦しくも面白く、それが土木の仕事の魅力<sup>だ</sup>と感じています。

——最後に、将来目指したい技術者像や学生へのメッセージをお願いします。

加藤——将来は「どんなトラブルでも受け止められる器を持った監督<sup>を</sup>」を目指したいです。学生の皆さんへのメッセージは、人と人とのつながりででき



写真3 工事関係者との打ち合わせ風景(右手前から3番目が山谷氏)

る仕事が土木の醍醐味であるということ。ぜひ、一緒に現場へ行きましょう。

山谷——私があこがれる技術者像は、現場のその時の状況や、想定される事象を限りある時間の中で、ベスト・ベターな解決策を見いだせる人です。そして、学生の皆さんへは、多くの現場で多くの人びとの生活を豊かにする仕事と一緒に取り組んで欲しいと思います。

## 取材を終えて...

モノをつくることだけが土木の仕事ではないという管理者の考え方はとても新鮮であった。立場が違う技術者が協力し、地域の安全を確保し発展を支えるために人生をかけることが、土木の魅力なのかと感じた。